

北條民雄の可能性

—「癩院受胎」「癩家族」をめぐって—

川
津

誠

A Study of Houzyou Tamio : “Raiinzyutai” and “Raikazoku”_____

The fame of Houzyou Tamio tends to rest on “Inoti no syoya” alone. It is not too much to say that his other works have seldom received the critical attention that they deserve. While it is true that Houzyou's works depict the way in which Hansen's disease patients live on in the face of death, this is not the only issue that he raises. This essay attempts to focus on other issues that are raised in his works through a close reading of “Raiinzyutai” and “Raikazoku”. This will lead us to perceive the multi-layered motifs that run through Houzyou's works.

中村光夫は、『文藝春秋』昭和十一年十一月号の文芸時評を「癩者の復活」と題して、北條民雄論を展開している。ここで中村は、以後北條を語るときに繰り返し使われることになる「いのちの理論」を次のように語ってみせた。

氏の苦悩はたんに自己の病苦に堪えることには存しない。それはまさしく精神を一個の物質と見ることを理知によつて強ひられながら「癩者の復活」を信ぜざるを得ぬ点に存するのだ。

これを「いのちの理論」と名づけた中村は北條の作品の「現代に生きる人間の苦悩を確かと把えて表現している」点に読者を「惹き付ける力が潜む」のだと評価し論を北條自身に向ける。「氏の病苦との闘ひはある意味で氏の実証主義との闘ひにはかならない」と述べ、そこから、「いのちの理論」が生まれてきたのだ、と言う。そして、その理論が北條の文学者としての機能そのものと断ずるのである。しかし、「文学者としての機能」を追いかけることはなく、中村は「北條氏はわが国の作家に稀に見る、真の意味のヒューマニストである」と断じ、「この純潔な作家がまさしくその清潔な資質のゆえに強ひられた文学以前の全身を賭した思想作業は環境の異常さに拘らず、いなむしろ環境の異常さの故に、現代文学の混乱に何物かを示唆する筈」だ、とも言うのであった。北條が見出したものを、「実証主義が如何様に精緻に人間を解析しようと決して把握できぬ生命そのものの生きる姿」だと結ぶ中村だが、彼の論は北條の、病の中でお生に向かい生命そのものを見つめようとする姿を前景に押し出してしまふ。そして、中

村が示した「いのちの理論」は、北條の作品世界をめぐる表現でありながら、北條自身の生きる姿勢と重ねられ、これ以後の北條をめぐる言説を規定していくことになったのである。例えば丸山静は「北條民雄論」（昭和十三年四月「叙情」）で「彼の原始的な生命そのものが、あらゆる人間理論を乗り越えて生き残ったといふこの単純な事実の発見こそ、彼の「いのちの理論」の生誕であった」と述べ、また平野謙は「道化芝居」を読んでの感想を連ね、丸山の論を引きながら、「北條民雄」昭和十三年四月。引用は平野健全集九巻による。「一度死んだ人間を葬り去って、はじめて頼者の目を獲得することができる。ここにはじめて「頼者の復活」は完了され、「いのちの理論」は生誕する」のだと述べている。「いのちの理論」は、北條を語る基本的な用語となるのである。

「北條民雄氏が「いのちの初夜」以来の沈黙を破り、「頼院受胎」「頼院記録」「眼帯記」等を発表している」と始められた中村の文芸時評であったが、しかし、北條のこれらの新作に殆ど触れることなく終わってしまった。北條は事実、「いのちの初夜」を昭和十一年二月に発表し評判となった後、四月に随筆の「猫料理」を出してはいるが、それ以後としても半年振りになる小説（「頼院受胎」）の発表であった。加えて、中村が挙げた三作同時に十月号に掲載された（「頼院受胎」「中央公論」／「頼院記録」「改造」／「眼帯記」「文学界」）のである。にもかかわらず、中村は作品にではなく、北條を中心にその論を展開して見せた。「いのちの初夜」による衝撃がかくも強かったのだ、と言うことは可能だし、それはおそらく正しいのだが、中村の「いのちの理論」に、これらの作品がいかに作用したのか、定かに語られることはなかった。そしてその後北條については「いのちの初夜」以外殆ど論じられなくなってしまいうことになる。

北條の衝撃的出現は、批評家や読者のみならず出版社をも刺激した。創元社から早くも十二月には作品集『いのちの初夜』が出版されることになる。光岡良二によれば（『いのちの火影』新潮社・昭和四十五・七）、小説の数をそろえる

ため、発行予定をのばして書いたばかりの「癩家族」を加えた、ということである。平野謙は「今日『いのちの初夜』一卷は『若い人』や『幸福』などとならんで女学生にも愛読されている」ことを伝えているが（前出）、女学生に愛読されることはともかく、北條と出版界を繋ぐ役を勤めた川端康成からの書簡によると、すぐに六〇〇〇部を数える売れ行きであった（昭和十二年二月五日付・「定本北條民雄全集・下巻」東京創元社）。とすれば、北條とその作品の受容は、作品集『いのちの初夜』によってなされた面も少なくはない。『文学界』の読者数を考えれば、読者層を文学愛好者から一般へと広げうる可能性は、むしろ『中央公論』に掲載された「癩院受胎」や「改造」の「癩院記録」の方であったろうし、この作品集であったと考えてよいと思われるのである。

語られること少ないこれらの作品、北條の唯一の作品集に収められた作品そのものを読み解いていくこと。本稿がここでおこなおうとするのは、ただの落穂拾いであるかも知れないが、また、北條の世界をそのまま、より豊かなものとして受容しようとする試みでもある。

2

「癩院受胎」は、成瀬利夫という人物を中心にストーリーが展開して行く。かなり重症患者である老人と、成瀬より八歳年長の船木兵衛。老人の重症の姿に己の病を映し、船木に「覚悟するよりほかありません。——中略——どんな敗残の肉体の中にも、美しい精神は育つ」と言わせてみれば、「いのちの初夜」の尾田や佐柄木の姿が重なって見える。そこに、「間木老人」の間木が姿を見せているのだとすれば、「癩院受胎」の基本的構図は見て取りやすいものとなる。むろん、癩を病んで隔離収容されている患者、彼ら自身を通してその世界を表現しようとする以上、幾つか

のタイプとして、患者の姿が似通ってくるのは当然であるとは言えよう。そして、「間木老人」や「いのちの初夜」の読者が一連の流れをそこに読み取るのは当然であるし、また作品集「いのちの初夜」で連続して読んでくれば、ごく自然に同じ人間の顔が思い浮かべられるだろう。ただ名前が違えばかりの。しかし、同じ流れを読むばかりでは「癩院受胎」の作品世界が広がって行かないのは、言うまでもない。注意しなければならないのは、差異である。

成瀬利夫は、「入院以来二年近くの月日に眺め聴き触れて来た隔離生活」を思いやっている。つまり彼は入院間もない患者ではない。また、「彼の足は、入院以前から左は膝小僧から下、ずつと枯れたやうになつてゐた」と書かれるように、入院以前からかなり病気の進んでゐたことが解る。この成瀬の病歴の設定が、入院その日であつた尾田や入院後三ヶ月ばかり過ぎた宇津との、重要な相異点であり、まずこの二年という時間が注意される必要がある。それだけの時間を院内で過ごし、それなりの時間を重ねてきたはずの成瀬が、改めて自身の病に向き合いながら、何に悩み苦しむのか。

物語の前半は、老人が作業中に釘を踏み抜き、それに気づかなかつたというエピソードに始まる。たまたま重病室で老人と船木と一緒に居あわせた成瀬が、以前病気をめぐつて船木との間で交わした入院当時の対話を回想することになる。その導入となるのが、成瀬に向けられた老人の言葉である。

「業な病ぢやのう」「あきらめたよ。成瀬さん、わしはもう何もかもあきらめたわい」と「今までに受けて来た数々の苦勞に押しひしがれ、いためつけられて、反抗する氣力もなく不幸な運命の前にただ項低れてゐる」ようである老人は言う。その姿、言葉に、成瀬は眠られない夜を過ごし、「自分もあなつて行く運命を背負つてゐるのか、そして生き抜く道は、老人の言つた通り、あきらめてしまふより他にないのか、何のなす所もなくこの病院に生涯を埋めただけに執着する本能の前に屈服して、浅ましい廢殘の姿を生き永らえて行く、それだけが自分に残された道なので

あらうか」と苦惱する、「やり場のない肉体の呻きを聴き、圧迫され、締め付けられた自分の、青年、を感ずる」のである。ここで見て取れる成瀬の姿は、入院後二年近くたって、それなりに自らの状況を認識した落ち着きを持ったもののそれではない。たとえば成瀬は、朝の起き抜けに廊下の冷気を足に感じることに些細な快感を重視している。「一見ささいな知覚上の快感が無数に重なり合つて、限りなく豊かな人間の感覚生活が築き上げられてゐるといふことを、かねてから信じて」おり、それらを失うことによつて、「自分もまた、全ての癩者がさうであるやうに、ひとつひとつ人間らしい生活が毀され、奪はれて行くのだと、強く考えさせられ」たりもする。この成瀬の苦惱は、それによつて病院にある状況を絶望するのではなく、むしろ病と自分という人間とを真剣に対峙させ考へる冷静さのほうに表面に表れていた。しかし、目の前の老人のけがと、それに続くあきらめの言葉は、殊更に成瀬を動揺させ、日常の平静さから切り離してしまふことになつた。「病菌は徐々に肉体を蝕み、営々と執拗な進行を続けつつあつたのである。——中略——入院後二年の今になつて、彼は初めて癩の恐ろしさを、自分のものとして識つたのであつた」と、大袈裟とも言える言葉で成瀬は苦惱の中に突き落とされる。そのようにして、船木との対話が回想されていくのである。

重症患者の苦しい様子に出会つた入院直後の成瀬は、補助介護に出でた船木と言葉を交わす。腫脹や潰裂こそないが、かなり激しいそれらの痕が残つた、「どす赤く猩猩を連想させる」顔をして、「茶色つぼく濁つた眼には赤く血を孕んだ血管が縦横に走つて」いる船木に誘われ、翌日彼を訪ねた。「まだ病院全体の雰囲気には馴染むことが出来ず、無意識的に反発し嫌悪して」いた成瀬に船木はいわば患者の覚悟を語つてきかせる。「肉体を持つてゐる限りここでは生きられません。断じて肉体は捨てなまならないんです。さうでなければここでは自殺するより他にないんですよ」「覚悟するより他ありません。行き抜く道はその上にあるでせう。肉体を捨てることです。どんな廃残の肉

体の中にも、美しい精神は育つんですからね」という船木の言葉は、一方で成瀬に船木自身の内部の不安と絶望を吐き出す言葉であるように思われもし、不安を植付けもする。結局このような境地とは、言い聞かせ続けるしかない、真にその思いに安住できはしないものなのではないか。不安を感じずにはいられなかったのが、入院当時の成瀬だった。

これは、確かに「いのちの初夜」の、尾田と佐柄木の対話に殆ど重ねることができ。昇り来る朝陽に向かって、「生きてみるんだ」と強く思う決意こそ示されていないけれど。「癩院受胎」について羽鳥一英は「北條民雄と川端康成」(『日本近代文学』昭和四十五・五)において、「いのちの初夜」と比べて、「問題の範囲を広げ、肯定をさらに否定へ深めたということが出来る」と述べているが、確かにその連続性は否定できない。が、連続性を言うなら、当然「間木老人」とのそれも注意されて良い。船木は、成瀬と同県人と設定される。しかも、成瀬の入院時既にそのことを知っており、いわば待ち構えていた。病院の外の、入院前の世界での繋がりをもって院内での関係に繋げて行うとする船木は、「間木老人」で、宇津との間に父親と軍隊時代親友であったという繋がりを持ち出す間木と重ねることができなくはない。

こういった「間木老人」「いのちの初夜」との類似は、入院時の苦悩にしばしば立ち戻ったり、共通の郷土意識によって繋がりを作ったり、と考えれば、院内での日常生活における自然な姿であろう。殊更に類似による連続性ばかりを考える必要はない。作品集『いのちの初夜』の収載に従って読んでくれば、その類似は言うまでもなく目につき意識されはしようが、それはまた別の設定で塗り替えられていくのでもある。

「癩院受胎」の次の展開は、船木の妹孝子と久留米六郎の物語である。これも、男と逃走未遂を起こし自殺してしまふ間木老人の娘と多少似通う話ではあるが、娘が自殺によって間木から家族を奪い死を選ばせる役割を担ったのと

違い、茅子は物語の中心となっている。しかし、茅子と久留米との恋愛が語られることは殆どない。二人だけが会っているのも、諍いの声を成瀬が聞く、それらしいと思われる場面があるばかりである。茅子は久留米の子を宿しているのだが、癩を病んで生きること絶望する久留米は結局自殺して果て、後に茅子が残されることになる。身勝手な男と行き場を求めて苦悩する女の物語がそこにはありうるが、茅子の苦悩が語られることも殆どない。この茅子の妊娠をめぐるの、言うならばにもかかわらず茅子を置き去りにして、久留米、船木、成瀬それぞれの苦悩が語られて行くのである。

久留米の苦悩は、「どんなに精神が勝利しても、この肉体の敗北がたまらない」と言い、「僕らは、慣れるというところが出来ない」と言うように、まず何より病氣に対するものであり、その意味では、成瀬や船木も持っているものである。しかし、彼は「自分の生に対して絶えず理屈ばかりつけてつじつまを合はさうと努力してゐる奴が大嫌いだ」と、船木を暗に批判する。そこには、自身の生を獲得しようという意思は見られない。「癩病がいやなんです」という、投げつけるような言葉にその思いは集約される。この姿勢は、茅子に対しても向けられている。「ぼくは美しい上品なものよりも、下劣な、下等な肉体的欲望で充分なんです。そいつが欲しいんです。」という久留米は、一方で盆踊りの子供達を「きれいだ」と「一心に眺める」のでもあるが、「肉体を求めて肉体に敗れた」と言うとき、久留米には自らの病の理不尽さと自身の無力さを突きつけてくるものとして、茅子の胎内の子が捕らえられている。解決の方法はあるのでは、という成瀬に対して、久留米は「解決というものが凡て虚偽」だと言うのだが、一度も茅子という名を言わず、赤ん坊、子供という言葉が発することもない。「盆が終ると死ぬことにしてゐる」「癩になつて生きることそれ自体虚偽だ」という言葉で久留米は自らの現在を、同時に船木の、成瀬の、そして茅子の現在をも否定する。それは成瀬に「引込まれて行くやうな不安」を覚えさせるほどであった。しかしそれは、茅子の中の新しく生ま

れ来るべき生命をも否定しうるものであるだろうか。後に成瀬が聞いた久留米と茅子の訝いの声は「俺が、俺が今まで死ねないこの気持ちだが、お前には判らんのか。お前への愛情だ。それが俺を狂はせるんだ。」というものだった。久留米が自殺に至るのは、自らの言葉どおりである。しかし、それは決して自らの理論に従う、納得した結果のものであるとは言えない。自身の現状と観念、意識との葛藤の中で、解決のつかないまま久留米は死を選ぶ。一方には、解決のつかないままに茅子が残される。それは、癩を病みながら、同じ病を病む者を父として子を産むこと、という問題に自ら、ただ一人で向かい合わせるをえなくなる、ということだ。そこには、男達とは違った、病の姿があるはずだ。しかし、茅子を物語は語ることをしなかった。ただ一度夕暮れの栗林で泣き悶える姿を成瀬に見せるばかりである。「生め」と兄船木に言われることは、茅子にとっては、まだ何の解決にもなりはしない。

女性の側の問題が茅子には見出されるにもかかわらず、茅子の相手である久留米にとって、女性という存在の意味は、さほど大きく与えられていたわけではない。「下等な肉体的欲望」という言葉は、癩を病むものとしての久留米の絶望に近い表出ではあったろうが、彼の苦悩は当然茅子の妊娠をいかに受けとめるか、に力点を移さざるをえない。病院内の男と女という、性の問題を担わねばならないのは、「青年」であることを思い悩む成瀬ということになる。茅子の存在が最初から成瀬にとって格別心惹かれるものであったわけではないが、「両方の眉毛が薄くなつてゐたが、それでもさほど醜いというほどではな」い茅子は、やはりおのずと視線の向く存在ではありえた。だからこそ成瀬は、久留米に話があるという船木の言葉に対する茅子の反応から、茅子が「女になったのではないかという奇妙な不安」を感じるのである。そして茅子に「不思議な魅力」を感じ強く心を動かされる。もちろん、茅子に対して「どうしようという気持ち」はないにせよ、「自分の内部にあるけもの染みたものが、今にも猛然と起き上がる」とす「る」ように感じもする。しかしまた、成瀬は、その感情を、茅子の変化のせいばかりにするのではなく、「自分の心

の中に果食つてゐるものがさう思はせた」のではないか、と思うほどに、自身の性的欲望を認識してもいた。茅子の妊娠を知って苛立ちを覚えた成瀬は、しかし「ただ女が欲しかったのだ。女の肉体だけを俺は欲望してゐたのだ。」という単純な事実に至りつき、「しかし癩だ、これが俺の欲望を圧しつけ、圧迫して、俺はただ女の映像を描いてそれに向つて苦しむだけ」だと思ふ。茅子が自分に身を投げかけてきたとしても病ゆえに拒むだろうとさえ思つのである。「下等な肉体的欲望」に身を任せることのできない成瀬がここにはいる。久留米との差はほんの僅かだが、越えられないほど大きいようにも見える。とはいへ、久留米とて、茅子への愛情に苦しんでいたのであつた。二人共には、自らが担わされた病ゆえに、ごく普通の青年らしい男女関係が構築できず苦しまねばならないという点では大きな差はないのである。

茅子と久留米の関係を前提としてその問題解決を描こうとするのではなく、成瀬の性的な苦悩をそこに付加したところが、「癩院受胎」という物語においては重要であつた。成瀬の苦悩は、解決されうる問題ではない。ただ自身の苦悩を、性そのものに関わる苦悩をより深くしていくだけでしかないかもしれない。久留米は、成瀬に茅子のことを問われて、「自分のこの腐りかかつた体を生かすために、墮胎しろつて言ふんですか。それとも未感染児童の保育所に送れと言ふんですか」という。光岡良二は『いのちの火影』（前出）の「多作の秋」の章で、「当時は、患者が所内結婚をするには、子供を作らぬため男子が精系手術を受けることが前提となつていた」と書いている。北條民雄の日記にも、東條耿一の妹が北條を想っていることを記し、「結婚したいが、精系手術のことを考へたらいやになつちまふ」（昭和十一年十月三十日）という記事が見える。「間木老人」や「いのちの初夜」が触れなかつた問題として、患者の性が、男女を共に収容する療養所であれば当然存在しうるものがここには描かれてある。まだ十分に考えられているわけでもなく、いくらか肉体に傾いた、偽悪的な面もなしとはしないものではあつたが、確かに新しい物語を語り出す

可能性を示したと言って良い。

今一人問題を抱えることになるのは、言うまでもなく船木である。「いのちの初夜」の佐柄木に繋がる人物と見やすいことは、既に見た成瀬との対話に示されたように、明らかではある。しかしまた、これも述べたように、成瀬を同県人と知り好意を示すようである船木には、間木老人の姿も重ねられるのである。船木がその存在を示すのは、成瀬との対話においてと今一つは妹茅子と久留米のことをめぐって、であるが、成瀬に癪を病んだ人間について語る船木には、殊更に注目すべきことはない。むしろ、同県人という、病院外の世界の属性を持ちこんで関係をつけるそのあり方が船木の重要な設定なのではないか。しかも船木には茅子という妹がいる。院外に繋がる家族関係を背負って船木はいる。これもまた、娘と共に入院していた間木老人と重ねられよう。物語が茅子と久留米に焦点を移していけば、この家族関係の方が重要になり勝って行くようでもある。

船木は成瀬と同県の由緒ある家の生まれである。もはや茅子と二人きりであり、二人が死ねば船木家も絶える。「滅び去らねばならぬ運命的な血の呻き」を成瀬に感じさせながら、眼にまで及ぼうという病勢に「覚悟はしている」と語る。

そんな船木を、妹の妊娠という事態が襲うことになる。船木は単純に二人を咎め、体裁の良い解決を求めるわけではない。自身の病も進んでいる中、妹を失うとすれば「自分の行く先が真暗になるやうに思はれる」といい、「なんとなく命の綱が切れるやうに感じられる」という船木は、しかし一方で「どうしても久留米が憎め」ず、自分のために茅子が意思を曲げねばならないとするなら「彼女は捨ててもいい」、好きなようにさせたい、と思ってもいる。船木もまた、久留米や成瀬と同様に、自身の直面する問題に満足できる解決を見出せないでいる。船木という「家」を病院の内にあって僅かに繋ぎとめているようであることに船木が執着しているとは思えないが、成瀬に向けられた、

自分達二人で船木の家も絶える、という自虐的な言葉には、船木の「家」に対する意識が透けて見えるようである。「旧家の血なんて、弱つてゐるし、それに濁つてゐる」と続けられる言葉に船木の心中を見ることが出来よう。だからこそ、妹を自由にさせたい、と思う船木なのである。

船木がともかくもの答えを強いられるのは、久留米の死によつて、であつた。腹の嬰兒を抱くように身悶え泣く茅子に対して、船木は「生め!」と「小さな、しかし腹の底から盛り上がるやうな太い声で」言う。新しい命に船木の姓をやると言う。そして何より伝染しないうちに「家に引き取つて貰へ」と。成瀬が船木の眼に見る「苦痛とも絶望とも見える翳が、強烈な意思と戦つて明滅する」さまは、船木の言葉が充分に考え抜かれたものではなかつたことを意味する。しかしまた、他にありえないという、妹に対する家長の如き意思をも。船木の家を次へ繋ぐことが目指されているわけではない。成瀬が久留米の言葉を思い出すように、それは当座の、虚偽の解決でしかないかもしれない。船木にとつて、それはおそらく問題にはならない。自身の言葉を後戻りさせまいとするかのように、「俺は今日は眼の手術をする日だ。義眼とは有難いものだ。どら、行かう」と言う船木は、癩を病んだ身にとつての日常を生きることを宣言するのである。

おりから、「間もなく躍り出て来るであらう太陽が、空高く光の穂先を放ち始め」る。「いのちの初夜」の末尾を思い起こさせる結末の背景である。その光の中にあるのは、誰であらう。船木は、とりあえず光の中にある。それが危機であろうとも。茅子はまだ船木の言葉を充分には理解していない。物語はそのようには書かれてこなかつたと言つてもよい。茅子こそ、光の中になければならないのだが。成瀬は、「底知れぬ暗黒」を感じ、「もう間近まで迫つて来た危機を鋭く意識」し、船木の名を呼ぶ。何が危機なのか、定かには語られない。この姿は、「間木老人」の末尾、大きな危機の前にあることを自覚して溜息をつく宇津と重なっている。成瀬には呼びかける船木がいるだけ、宇津よ

りはましかもしれないが、何も解決されずにあることは同じである。

「間木老人」「いのちの初夜」の、先行する二作品の世界を重ねるように「癩院受胎」は幕を閉じる。繰り返すが、そこには何も解決されたものはない。ただ、成瀬、船木、久留米というそれぞれが問題を抱えていることが示された。それは、「癩」を病んでいることによって生まれてくる、いかに癩を病みつつ生きるか、といった特殊な苦悩ばかりなのではなかったことが注意されねばならない。問題は解決などされない。それは、病院の外の世界においても同様である。まして、彼らが病院の中で悟りすませばよいといったことではないのだ。成瀬の感じる「青年」は誰ももののだ。「癩院受胎」は、そのようにも癩を病むものたちの問題はあのだ、という、そのことを伝える物語と読むことができるのである。

3

既に述べたように、作品集『いのちの初夜』を纏めるにあたって、北條は小説の数を揃えたいと願い、今一つの作品を発表した。それが「癩家族」である。昭和十一年の『文芸春秋』十二月号であった。作品集出版の直前のことである。その前に、「あらしを継ぐもの」と題した小説が書かれたが、川端康成によって発表は見合わせられた。川端の書簡にそのことが触れられており（昭和十一年十月十四日）、それを受けて北條は十六日の返書に「あらしを継ぐものが駄作であることは自分でも十分承知して」いること、「癩家族」を書き続けていることを記している。「癩家族」の脱稿は、日記によれば十月十八日。北條は「愉快なり。だが駄作。」とだけ書いた。

「癩家族」は、石戸家の物語である。石戸佐七は癩を病んである療養所に入院している。その息子佐吉も二年ほど

前に入院してきた。現在は重病室にいる。佐七にはふゆ子という娘もある。ふゆ子も発病しており、佐七と一緒に入院したのだった。佐七には、発病の前兆がありながら病気に對する十分な知識のなさから結婚に踏み切ってしまったという思いがあり、それが佐吉、ふゆ子の発病に對する負い目となっていた。そこに、最後の息子佐太郎の発病、入院の知らせが届く。その知らせの遣り取りを通して、佐七と佐吉、ふゆ子、そしてふゆ子と佐吉の葛藤が描かれて行くのである。

佐七は、ふゆ子の発病を受け、自身の病勢も悪化しつづつあったことと佐吉の将来の結婚の災いにならないようにと二人で入院したのだったが、佐吉の発病でその氣遣いも無駄になった。佐吉は母親から、佐七が病気を隠して結婚したのだと聞かされており、それ以後佐七に對する憎悪を持ってしまった。父と子という繋がりがあれば、憎みきることはできないが、その葛藤に苦しみ、佐七に對して、子としての情愛ある対応ができずにいるのである。佐七は、負い目があることに加えて、佐吉の入院後の取付く島もない対応に、おどおどと応じることしかできない。その間で心優しいふゆ子は苦慮している……。と、このようにおおよその状況を纏めてみると、物語そのものはさして変わっては見えない。かつて国により患者が強制的に収容されていた時代でも、このような家族の例が多く見られたというわけではなかったろう。しかしそれにしても、佐七、佐吉、ふゆ子の三人の微妙な緊張関係の中に下の弟を加えるというのは、想像しやすい展開と言わねばならないだろう。安易に彼らを氣の毒がることが読者に求められようはずもないのだから、物語としては緊張を伴いながら、弟佐太郎の入院後、いかにこの関係が変貌していくのか、に興味が繋がれうところだが、残念ながら佐太郎の入院で全ては閉じられてしまう。

佐吉を前にして、「仕方がない、仕方がない」と呟く佐七は、親子の愛情も優しい息子の心も何もかも病気に打ち毀されてしまったと思ひ、「それといつてどうしやうがあるだらうか」とあきらめの溜息をもらすしかない。この、

仕方がない、と思つてしまえる佐七の姿が、想像しやすい展開を救つている、と言えようか。佐七は一方、自身が一緒に連れてきたふゆ子に対しては、そのやさしい対応のせいも、親密で情愛に溢れた関係を保ちえているのである。この佐七の態度の違いは、佐吉の後継ぎという、長男という地位のゆえであるように思えるのだが、家、家族という制度の中に無自覚に浸つてしまつてゐる姿が見える。病勢が悪化し片足になるときも小鳥取りができなくなるのでは悲しんだほど楽しみにしているその小鳥取りの場面の佐七の生き生きとした姿を併せれば、「癩家族」は、佐七という存在そのものの魅力が支えているといつてよいが、残念ながら佐七には、療養所の内外双方における自分の家の變貌の可能性に対する意識はない。

佐七とふゆ子が家を去り入院する。妻と佐吉と佐太郎が残る。そして佐吉が入院する。家庭に残るのは二人。院内の家族は三人になる。そして佐太郎が入院する。おそらく妻は一人家を守るわけではない。実際の家は崩壊し、院内に四人の家族の家が生まれる。佐七を中心にして、そのように家の移動がなされうるか。そのままのものではないにせよ、院外で作られていた家に繋がる同じ家が院内に生まれうるだろうか。「癩家族」という物語は、その可能性を問ひかけてくる。石戸家は不幸な家族だが、院内でそれぞれが寄り添つて家を作つて生きることができらうか。例えば間木老人が娘を失つては生きていけなかつたそれほどに支えられていた、そのような家を。

十分に「家」を問ひ続けることなく佐太郎の入院の場面で突然閉じられてしまつた物語はしかし、読み手に対して、その可能性に対する判断を押し黙つたまま求めてもいる。

中村光夫の言う「いのちの理論」は、北條民雄が「いのちの初夜」の結末を託した、「やはり生きてみることで」という一言に繋がる尾田―ほぼ北條と等身に重なると考えられた―の精神の動きと、北條民雄という作家が癩を病んでいた、というその事実とによって生み出されたものであった。しかし、北條がそれに続いて描いて見せる「癩院受胎」や「癩家族」は、「間木老人」もそう言ってもよいが、そのレットテルによってイメージされる以上の世界である。

「いのちの初夜」と同じ月には、島木健作の「第一義の道」が発表されているが、それよりもはるかに強く人間の第一義の道がそこには示されてあるように見えた。そしてこの月昭和十一年二月は、二・二六事件の起きた月でもある。一月には、同じ『文学界』に阿部知二は「冬の宿」の連載を始めていた。充分に情報が流れていたわけではない以上、時代が如何なる状況にあり何処へ向かっていくか定かではないが、何とない閉塞の思いがあった。「第一義の道」も「冬の宿」もそんな時代ゆえに生まれてきたといってもよい。そこに登場した「いのちの初夜」は、まったく時代と関わりなく、純粹な人間そのものの姿を読み手に突きつけるものであった。その力に引き摺られるように「いのちの理論」が読まれたとしても、それはむろん誤りであろうはずはない。それは確かに時代を反映した読み方でもあった。しかし。

その先の北條の作品世界の展開はどのような可能性を見せていたのか。少なくとも『いのちの初夜』という作品集に北條が収めた「癩院受胎」「癩家族」には、確かに「癩」を病む人々の姿しか書かれていないけれど、そして、十分に考え尽くされた完成度の高さを持つてはいないけれど、そこに表現された彼らの苦しみはその病ゆえの特殊なものばかりではなかったことを、確認しておきたい。

北條民雄の命は、『いのちの初夜』刊行の一年後、昭和十二年十二月五日に絶える。もう殆ど時間は残されていない

い。次に北條民雄は何を書こうとしたのだろうか。東京創元社版の全集には、生前発表された最後の作品である「望郷歌」と、先に述べた「あらしを継ぐもの」の改題である「吹雪の産声」、そして「道化芝居」「青春の天刑病者達」「癩を病む青年達」という小説が残されている。そこには、癩を病んで隔離収容されている人間達の世界が描かれている。そればかり、と言えましょう。しかし、それらの小説作品もまた詳細にたどられることによって、北條民雄の可能性を明らかにしていくに違いないのである。

付記

- (1) 本稿ではハンセン病に対する呼称として、北條が使用している「癩」をそのまま用いた。言うまでもなく、この語は現在ではかつての差別に繋がる言葉として排除されているものだが、作品を読み解きそれを語るために必要と判断した。
- (2) 本稿中、北條の作品の引用は東京創元社版の全集によった。